

夕
方
に

夕方に子供の遊ぶころとなり町にも下る青き
うす靄

すかされて泣く目をやりし夕空に遠くやさし
き月照り居たり

夏來れば築地の朝の好もしき海の風吹く凌霄
花

バラソルに通る雲より雨落ち來甲^{かん}走^{はし}りたる聲
を立てつゝ

むし暑く寝ぐるしき夜も青白うやゝ冷えそめ
て鳩なく聲す

大風の吹き過ぎ行きし遠き音きゝつゝ居れば
夜のおそろしさ

はした女が廚くりやの隅に泣いてゐる白き前かけし
みづかなし

泣き止やみて頭のいたきたよりなをさなこころさ幼心地のふ
とよみがへる

おそろしき夏の闇夜に飛びかひし螢の隣の記
憶かなしも

風邪の後始めて入れる湯上りのつかれに抱かれ物音をきく

寝て見れば寝起のわるさ梅雨時のじめくとするもの惱ましさ

梅雨時の執念き濕りしづみ居る厨の隅の生姜のほひ

藥

198

鳩起きて軒のとやより挨拶す花壇の芥子は朝
風に揺る

薔薇色に雲のにはへば朝の唄鳩のうたひて花
壇おとなふ

真中の小さき黄色のさかづきに甘き香もれる
水仙の花

花びらの眞紅しんくの光澤つやに強き日を照り返し居る
雛芥子の花

愛らしき金きんのさかづきさし上げて日のひかり
くむ花菱草よ

しほらしき野薔薇の花を雨は打つたゝかれて
散るほの白き花

ゆづり葉の新芽^{しんが}かはゆしやはらかき緑もたぐ
る桃いろの莖

象の肌のけうとさおもふ椿の木枝さき重き花
のかたまり

黒もじのうす黄の花にやはらかき雨ふりそゝ
ぎ春の暮れ行く

愛に酔ふ雌蕊めしよ雄蕊おしよを取りかこむうばらの花を
つつむ晝の日

花びらをひろげ疲れしおとろへに牡丹重たく
萼くさねをはなるゝ

芍薬しやくやくの黄いろの花粉日にたゞれ香をかぐ人に
媚薬こびやく吐く

桐の花露のおりくる黎明しやうめいにうす紫むらさきのしとやか
さかな

桃の實の肌のやうなるうぶ毛して少年の頬の
うひくしさよ

金魚草にトンボとまりて金きんの眼を日にまはす
時ドンのとらるく

眞晝野に晝顔咲けりまじくと待つものもな
き晝顔の花

あつき日を幾日も吸ひてつゆ甘く葡萄の熟す
深き夏かな

紐

212

結べども桃いろにならぬ愁^{うれひ}かなくれなるの紐
白妙の紐

紅薔薇見し眼を移す白百合のそのうす青さ君
が頬に見る

如月^{きさらぎ}や電車に遠き山の手のからたち垣に三十
三才鳴く

宿^{やど}の山蜜柑ならびて黄なる實の朝日受け取る
枝葉^{えだは}の中に

菜の花の黄色小雨にとけあひてほのににじめる
晝のあかるみ

二階より君とならびて肩ふれて見^み下^{くだ}す庭のヒ
ヤシンスかな

舞ひ終へて扇を前に會釋する舞妓が肩の息な
つかしむ

灰いろに埃ほこりかゝれるかなめ垣うるほふ雨に矢
來を通る

汽船かふねに居て湊の町のわか葉見る陸にも海にも
晝の日光る

海荒る、前の沈黙しんもく雲おもく島山よもぎにほひ
ながる、

水引の根をあらひ行く野の水の淀みにうつる
秋の夕映はえ

あ

か

り

222

母は子に思ひ絶えよとさとしけりその夜の月
は二人てらしぬ

戀ゆるに人をあやめしたをや女の墓ある寺の
紅梅の花

をんな坂袖もつれあふ舞姫がかすみに濡るゝ
朝詣かな

顔と顔よせて行燈の繪を見るや櫻にほふう
すあかり哉

物かげに怖ぢし目高のにげさまにさゝ濁りす
る春の水哉

風絶えてくもる真晝をものうげに虻なく畑の
そら豆の花

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしても

空もやう氣にしてもあによめ 嫂あによめに門の桃散る雨ふくむ風

葦あし菜な生はふる池をめぐりて奥庭のほくら祠見ほくらに行く晝の雨かな

水ぐるま近きひゞきに少しゆれ少しゆれある
小手鞠の花

うす曇遠がみなりをきく野邊の小草がなかの
晝顔の花

川風に堤の野菊花ゆれてさむき朝なり鳩鳥の
なく(明治四十一年十月利根川に遊ぶ四首)

網に入る鮭のうろこにうそ寒う夕日ひかりぬ
船の秋風

月さむき夜頃となりぬ蘆の穂のしろき堤のこ
ほろぎの聲

一村ひとむらの夢おだやかに月ふけて小草の露に虫の
音ぞすむ

家ごとに引窓つけてあかりとる竹の山崎簾の
うへの月

うしろつきもしやと思ひおもふ間に傘遠ざか
るたそがれの雪

八
つ
口

236

うす雪は小雨にとけてうぐひすのさゝなきを
きく簾かげの道

春の雪をんなの人の八つ口の傘をこぼれて匂
ふみちわる

いもうとの小さき歩みいそがせて千代紙かひ
に行く月夜かな

おくれては母のあと追ふをさな兒のおさげの
髪に春の風吹く

二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり
菜の花のみち

田舎町の料理屋の庭に桃が咲きならべてほせ
る番傘ひかる

る音もなる

田舎の林屋の音は

葉の音もなる

242

二人の音もなる

葉の音もなる

二人の音もなる

藪かげのくろき朽葉のうづたかき流に落つる
紅椿かな

燕とぶ雨後の往來日陰日なたくつきりせるを
よろこびとほる

朝月は小萩の露にしづみけりあかつきやみの
こほろぎの聲

大原や野菊花咲くみちのべに京へ行く子か、母
と憩へる

野菊一むら水をおほへるいさら川さゝやき細
い野は暮れにけり

落葉やく青き煙のよごみたる林をゆけば雨の
おちくる

時雨降り早仕舞せる宵町のくゞり障子のともし灯の色

246

集のすゑに

こゝに集めたのは、明治三十四年自分が十六歳の頃から、大正二年二十八歳迄の歌である。しかし前の歌は少く近年の歌が多い。

並べ方は新しいのを先にした。今の自分に近いものから順にした迄である。

この集を公けにするに當つて、自分が未だ十三歳位の少年の頃から、れんごるな教を賜つた佐々木信綱先生と、常に直接問

接に自分を激勵してくれた白樺同人諸兄に、心より感謝の意を捧げる。

又、有島生馬三浦直介二兄の一方ならぬ好意によつて、此集が好ましい體裁に出來たのを、自分は難有く思つて居る。

自分の初子うひこの利公は、一昨年うひこの八月六日の朝生れ、五日間生き居て、十日の夕方に死んだ。彼は月足らずであつたから、胎内で外界の生活に堪へるだけの準備が出來て居なかつた。こんなにな今生の縁の薄いものではあつたが、自分は産婦に知らせられない間は一人で、知らせてからは二人で顔をしめかして泣いた。子供を失ふ悲をひしぐくさ知つた。

集中「利公の爲に」云ふ一章は當時の作である。この集を彼に贈つたのも、利公を記念する爲の親心に他ならぬ。

大正三年三月三日

利 玄

大正三年五月廿三日印刷
大正三年五月廿六日發行

銀 與付 不許複製
定價 金 壹 圓



著 者	木 下 利 玄
發 行 者	河 本 龜 之 助
印 刷 者	河 本 俊 三
印 刷 所	洛 陽 堂 印 刷 所

發行所

東京市麹町區平河町五丁目卅六
振替口座東京二〇九一四番

洛 陽 堂

電話番町四二五八番

317
289

終

